今週の一冊

辻邦生が見た20世紀末

信濃毎日新聞社●本体価格二〇〇〇円

辻　邦生著

一〇年経ても輝きを増す現代人へのメッセージ

評者　北村行伸・一橋大学経済研究所助教授

本書は昨年七月二九日に軽井沢で急逝された作家・辻邦生氏が信濃毎日新聞の夕刊に過去一〇年間、週一回載せてこられたエッセイをまとめたものである。本書はちょうど一周忌に出版されたもので、辻邦生氏のメッセージが生き生きと伝わってくることに新たな感動を覚えたので、ここにご紹介したい。

辻邦生氏は本業の小説を別にしても、映画、美術、音楽、文学全般にわたる幅広い分野にわたって、随筆、コラムを残されてきた。しかし、時事問題について書かれたものはこれが最初で最後であろう。本書のなかで扱われたトピックは多岐にわたるが、一〇年間というかなり長い期間中に、氏のものを見る視点がまったく変わっていないことには驚きを禁じえない。その真のメッセージは、①平和の維持の大切さ、②生きることの喜び、③美しいものに触れる喜び、④自然環境の大切さ、その美しさ、⑤世界中の出来事に対する好奇心、⑥スポーツや映画、音楽、芸術をわけ隔てなく愛する健全な精神、ということになるだろうか。

経済学者が新聞や雑誌のコラムに書く内容が時として三ヵ月もすればピントはずれの議論になってしまうのとは対照的に、わが国の古典や西欧文化に対する深い教養に裏打ちされた辻邦生氏の議論は、一〇年たってもいささかも風化しないどころか、ますます輝きを増しているように思われる。

辻邦生の思想の原点

具体的に引用してみよう。辻邦生氏は自らの戦中体験を通して、国際紛争の手段としての戦争には断じて反対されている。そして「人類から戦争手段をのぞくこと――この一つのことを世界にくりかえし説くことが、どんなに遠まわりに見えても、日本がやるべき道ではないか」と主張されている（一九九一年一一月二九日付）。また、美しいものについても、耽美派的な美そのものが目的であるかのような立場はとらない。フランスの小説家プルーストを引用して、「彼はきわめて耿美的な世界を創造したが、それにもかかわらず、美の与える快楽だけを追求したのでは美を豊かに味わうことはできない、と言っている。それは、幸福のための幸福追求が倦怠に終わるのと同じで、美もまた、美の与える喜びよりも、もっと大事なことを愛するとき、そのおまけとして、美的な快楽が与えられる、という」と論じている（一九九四年六月三日付）。

辻邦生氏がいかに健全で生活という人生でもっとも基本的なことを大切にされたかということは、「日本の危機とは金融問題もあり、高齢化の問題もある。だが、それ以上に深刻なのは、外国のことが解らなくなり、日本だけが相変わらず、何が生活で真に大切かを感じなくなってしまうことだ。その意味で、今こそ、日本人が、人間にとって何が真に大切であるかを本気で考える時だと思わざるをえない」と書かれていることからも明らかだ（一九九七年三月七日付）。

経済についての見方も明解である。すなわち、「経済は勝手に動くようだが、個人の倫理がその体質を支えていることを忘れるべきではないだろう」ということである（一九九七年五月二三日付）。このような考え方はノーベル賞経済学者のアマーティア・センの考えに通じるものがある。

氏は迫り来る老齢に対しても積極的に立ち向かっておられた。「今日という日のすばらしさに心を高鳴らすかぎり、人は老いるということはない。現代には老人の悲劇は多いが、それを含めて、すべてを感謝をもって引き受けたい。筆者のモットーは『積極的な楽天主義』といっていいかもしれない」（一九九五年四月二一日付）。

氏の真骨頂はこの楽天主義にある。「決して絶望することなく、人間を信頼し、日々よき未来を作ることに努力すること――われわれの道もそれ以外にあろうとは思えない」（一九九六年二月九日）。評者もまったく同感である。一人でも多くの方に一読をお勧めする。

著者のプロフィール
つじ　くにお
小説家。1925年生まれ。東京大学仏文科卒後、57年から61年までフランス留学。91年まで学習院大学教授。99年7月29日、滞在中の軽井沢で死去。
主な著作に『廻廊にて』、『安土往還記』、『背教者ユリアヌス』、『銀杏散りやまず』、『西行花伝』など。

この本の目次

一九九〇年
信州に学んだころ／読書の秋に寄せて、など
一九九一年
人間という名の〈自然〉／信濃の野の花、など
一九九二年
愛するとき美は育つ／ある週刊誌の終刊によせて、など
一九九三年
国家解体のあとに／「ニキータ」の語るもの、など
一九九四年
あえて「和」を尊ぶのは／「希望」という言葉、など
一九九五年
幸福と快楽の間／病んだ社会が見える、など
一九九六年
パリのセザンヌ展／ある歴史誤認とその理由、など
一九九七年
静かな新年に思う／美しい心中は是か非か、など
一九九八年
文化の土台に徹した人／多チャンネル時代を前に、など
一九九九年
通貨統合にみる未来志向／世界は危機の中に生きる、など

◉北村行伸、磯崎哲也、永井 猛、西村清彦、秦 信行、飯田 隆、西山賢一、池田信夫、井上義朗各氏の書評を順に掲載しています。